**「憐れに思い」ってどんな思い？ 　2016年6月5日**

**ルカ7:11-17 牧師 安達均**

**このメッセージの中に、聖霊が豊かに注がれ、どうか主が一人一人を憐れんでくださいますように！**

**月一回、土曜日には、私の自宅で聖書の学びをしている。　この月一回の学びは、私が牧師になる何年も前からやっており、１８年近くになると思う。　ここ数年は、課題とするビデオを10分－30分くらい見て、その前に、関連する聖書箇所を読み、ビデオ鑑賞後にみなでディスカッションをしている。**

**先月から見始めたビデオは、水野源三さんの生涯を描いた映画をみている。　水野さんは第二次世界大戦後まだまもないころ、小学生だったが、赤痢となり、高熱が続き、脳をおかされ、いっさい体を動かせなくなってしまった。　しかし、微笑むこと、また瞬きをすることは、できた。**

**そのビデオの最初の方では、母親が体をうごかせなくなってしまった源三さんをおぶって、医者につれていく様子が映画の一シーンになっており、そこで、母親は、「私の命に変えてでも、この子をなんとかしてあげなくては。」と語っていた、母の言葉が、妙に印象にのこっている。　そこに親の子に対する、思い、愛情が描写されている。**

**さて与えられた聖書の箇所に入っていきたい。　イエスがナザレ地方で、さまざまな奇跡を起こされ、イエスに従う人々の数が、どんどん増えてきていた。　そして、イエスとその一向が、ナインという町にやってきた。**

**すると、お葬式に出くわした。　その葬式というのは、若い男性のものだった。　その母親も、当然、葬式に参列していたが、その母親の気持ちを想像するに、なんとも、言葉にはあらわしがたいものがあった。　というのは、その母親のご主人がいたのだが、その彼はもう泣くなっていた。　つまり未亡人だった。**

**その未亡人には、一人の息子しかいなかった。つまり、ご主人が亡くなった上に、一人息子に先立たれたわけだ。　その気持ちを思うだけでも、まずはこの母親がどんな気持ちだったか、想像できるかと思う。　イエスは、この一人息子をなくした未亡人を見て、「憐れに思い」と、聖書は簡単に記しているが、イエスが思ってくださる「憐れ」の意味が、少しわかってくるかと思う。**

**この「憐れ」という言葉、奥が深く、さらに、考えてみたい。　ここで「憐れに思う」と日本語に訳された言葉は、ギリシャ語では、「スプランクニゾマイ」という動詞が使われている。　「スプランクナ」とは「内臓、はらわた」のことで、ゾマイはその動詞の語尾。　つまり、「はらわた動く」とでもいったらよいだろうか？**

**日本語には、「はらが立つ」という、怒った時の表現があるが、強い感情は、内臓にあらわれることがあるのだと思う。　自分の目の前にいる、息子を失った未亡人。　この未亡人は、もちろんご主人を失うだけでもたいへん。　さらに育ててきた息子への愛情、それはそれは、自分の命に代えてでも、息子の命は守りたいと思っていたことだろう。**

**しかし、亡くなってしまったことで、自分の至らなさを思う思いをあっただろう。もっとなんかしてあげられなかったのだろうか？　そういう自分を攻めてしまう気持ちあったのではないかと想像する。　　その痛みを、自分の体で感じてくださるイエスがおられる。　そのイエスの、深い共感を意味しているのが、「スプランクノゾマイ」　「はらわたが動く」という言葉なのだと思う。**

**主イエスキリストという方は、この人類のすべてのさまざまな痛みを共感してくださるお方だと思う。　その痛みの真っ只中に主イエスがかかわってくださる。　自分の命にひきかえても、どんぞこに陥る、私たちを、どん底から救い出してくださる方。**

**みずから、すべてを空にして、父なる神が創造されたすべての子供たちのために、十字架にかかり、死の谷から、絶望から救い出してくださる。　それは、十字架の死が死ではおわらなかった。　復活があった。　死から新しい命へ、新たな希望の中においてくださる。**

**今週、またあらたな一週間の中で、どんな人生の局面を迎えるかわからないが、たとえどんな苦しみを体験することになったとしても、ともに苦しみ、共感してくださる、そして、大きな復活へとつながっている主イエスを覚えられますように！**